

# 白牛母子の旅

## 嶺岡と江戸への陸上ルートをたどる

いわもと いわみのかみ まさとも

岩本石見守正倫 嶺岡紀行から

寛政4年(1792年)2月3日～3月1日



参考資料：船橋西図書館資料集第八集

嶺岡牧を歩く(青木更吉 嶋書房)

文責：大井里山保全協議会 芳賀裕

# 岩本正倫とは？

岩本石見守正倫は、甲斐の国岩下村（現韮崎市）岩本家の出身、徳川幕府に仕え、父が知行二千石の岩本正利、長姉お富の方は、第十一代将軍家斎（いえなり）の母である。

（徳川家斎は將軍職を五十年つとめた）

老中・田沼が失脚後に、実権は松平定信（吉宗の孫）に移る。財政立て直しを経費削減・豪商の市場原理等に頼る手法を取る。

正倫は寛政五年（1793・37歳）に、小金、峯岡、佐倉三牧の取締支配に任せられた。「寛政の改革」の流れに沿って、各牧の経営の採算性向上を図った。改革を進める視察目的の28日間の紀行文は当時の姿を知る上で貴重な資料である。

# 嶺岡牧の起源

その前身は「延喜式」(927年)の記述がある「おのしの馬牧(柱木牧)」である。更に里見氏の時代に軍馬育成の目的で嶺岡牧を開く。慶長19年(1614年)に江戸幕府の里見改易以降は、幕府の管轄下に置かれ、代官の経営する体制となった。その経営は積極的ではなく、半ば放置状態であった。

そして…元禄16年(1703年)の房総沖地震が発生!!

\*柱木牧と嶺岡牧に囲まれたのが大井地区。里見改易後の検地が元和4年(1618年)に実施され天領となった。

# 元禄16年(1703年) 11月の房総沖大地震 で嶺岡牧は中絶！

嶺岡山系一帯に大規模な地割れが発生、がけ崩れ等で野馬の多くが死ぬ被害が出て、嶺岡牧は中絶する。  
6,500人以上の死者を出した房総の状況は千葉県防災課発行の「防災誌元禄地震」を参照。

一、峯岡山御野馬の儀、元禄十六未ノ年  
百拾五疋御座候処ニ、同年大地震の節、  
岩崩落懸り数多損シ申候。

# 再開にむけた調査・・・綿貫野馬奉行

享保6年(1721年)（吉宗の享保の改革の一環）

- ① 嶺岡山は牧に適しているか？
- ② 牧の野馬をオオカミ等から守れるか？
- ③ 牧に出来る所を絵図にして面積を調査する

→綿貫奉行の調査報告骨子

- ① 牧と村の境に囲いを念入りに作れば牧にできる
- ② 鉄砲の使用を許可すればオオカミから守れる
- ③ 牧の面積と野馬の数(57匹)を調査
- ④ 野馬の生息環境報告(休息場所・餌場・湧水等)

→ 享保7年(1722年)に牧は再興(西牧・東牧)

同11年 柱木牧再開

翌12年に西一牧・西二牧・東上牧・東下牧・柱木牧の5牧体制

## 岩本石見守正倫の視察後の改善策 (家斉の寛政の改革の一環)

岩本正倫は寛政五年(1793・37歳)に、小金、峯岡、佐倉三牧の取締支配に任せられた。改革を進める目的で視察を1792年2月3日～3月1日で実施、財政改善策を打ち出した。

岩本正倫一行の旅は、片道3泊4日、1日40km前後の距離を動いており、当時の人々の健脚ぶりを知ることもできる。

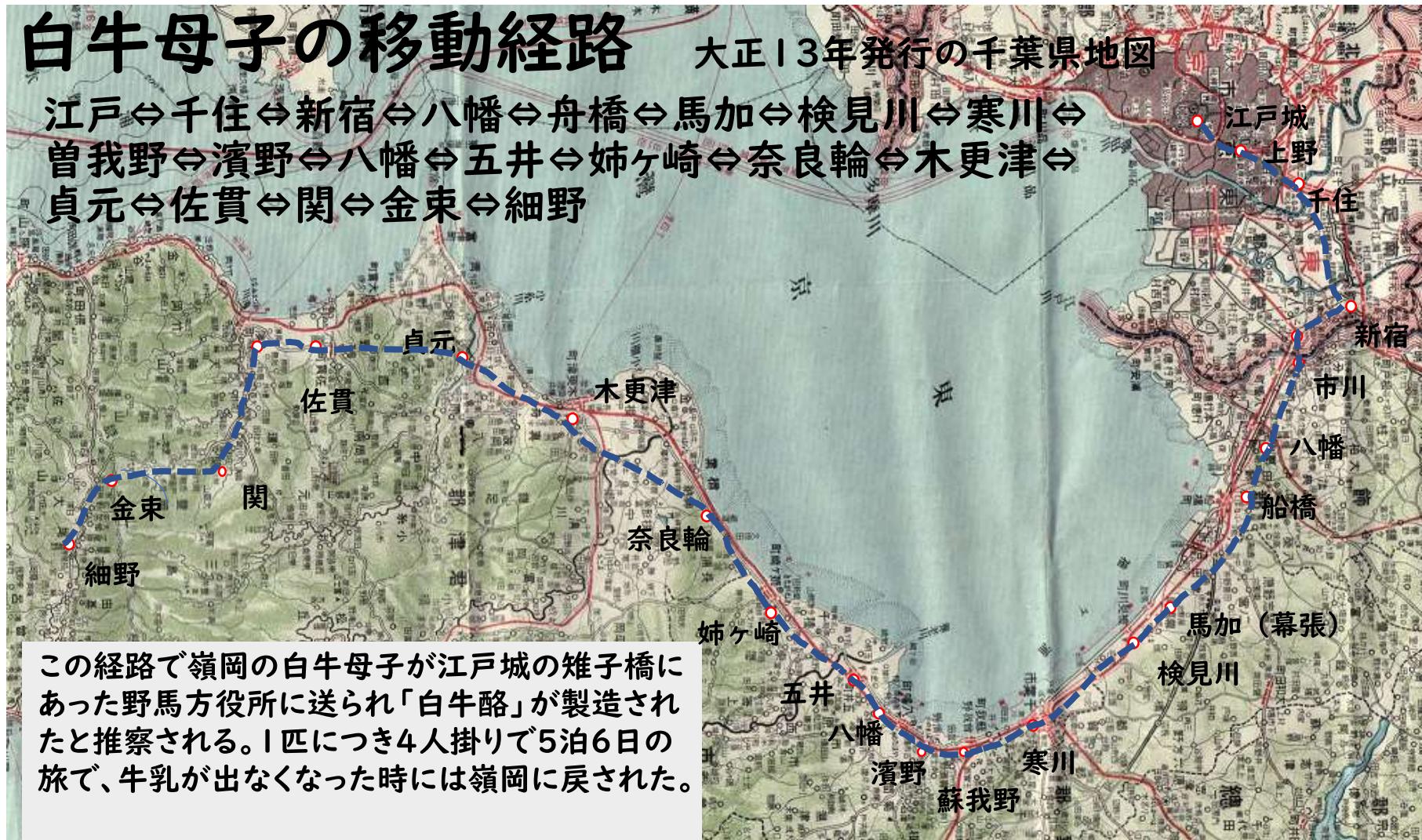
- ① 白牛母と生まれた子牛を江戸城内に移送して白牛酪の製造  
(5泊6日以上の旅で、1匹に人足が4人つく大仕事であった)
- ② 峰岡牧と幕府直轄林(御林)の木を炭に加工、江戸で販売  
(炭については「炭と大井」を参照)

彼の紀行文には短歌も多く読まれており、当時の地域を想起させる貴重な記録でもある。

# 白牛母子の移動経路

大正13年発行の千葉県地図

江戸 ⇄ 千住 ⇄ 新宿 ⇄ 八幡 ⇄ 舟橋 ⇄ 馬加 ⇄ 検見川 ⇄ 寒川 ⇄  
曾我野 ⇄ 濱野 ⇄ 八幡 ⇄ 五井 ⇄ 姉ヶ崎 ⇄ 奈良輪 ⇄ 木更津 ⇄  
貞元 ⇄ 佐貫 ⇄ 関 ⇄ 金束 ⇄ 細野



この経路で嶺岡の白牛母子が江戸城の雉子橋に  
あった野馬方役所に送られ「白牛酪」が製造され  
たと推察される。1匹につき4人掛りで5泊6日の  
旅で、牛乳が出なくなった時には嶺岡に戻された。

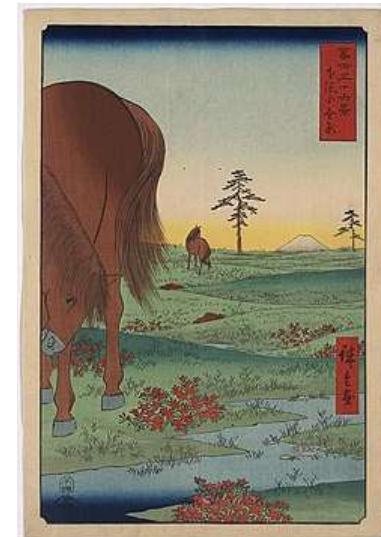
# 西船橋図書館所蔵史料集第八集・嶺岡紀行 に学ぶ

同図書館には他にもこの時代を知ることができる岩本正倫の紀行文が保管・研究されており、当時の大井や嶺岡のことを知る上で貴重な資料となっている。

岩本正倫によって、嶺岡の「白牛母子」と「炭」が江戸と結ばれ、嶺岡にも大きな変化をもたらした。

今回は、嶺岡紀行を当時の歌川広重の江戸百景等も交えてたどる事とした。右図は富士三十六景の小金牧図、みねおか山系からも富士が望め、正倫の歌。

夕日さす 霞の空の はれて今  
みね岡山に むかふふしのね



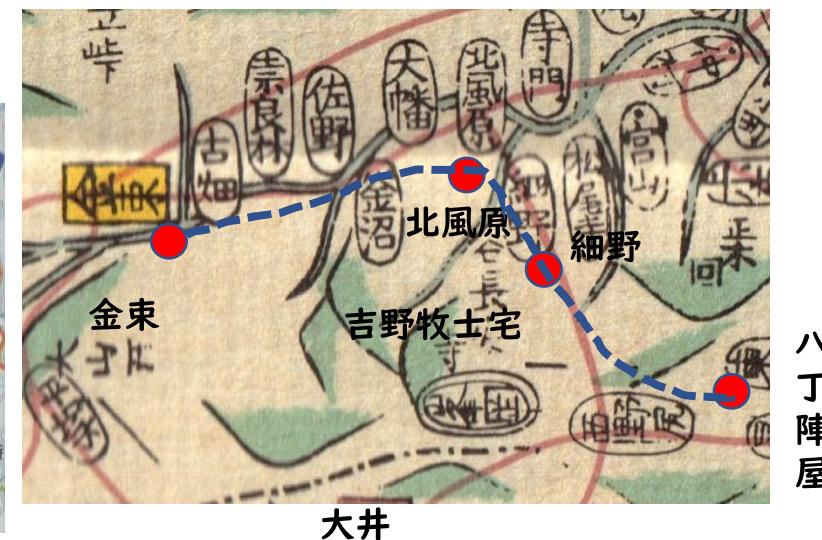
# 江戸時代の房州往還

館山から船橋に至る  
街道で、佐貫 ⇄ 木更  
津 ⇄ 五井 ⇄ 浜野 ⇄ 千  
葉 ⇄ 船橋までの距離  
で約77km、2泊の道  
のりであった。





**嶺岡紀行 1792年閏2月6日**  
**佐貫→関→木の根峠→金束→**  
**北風原(ならいはら)**  
**→細野(宮山)→嶺岡西二御牧→**  
**嶺岡役所(八丁陣屋)**  
**宿泊初日の火災発生→細野の**  
**吉野牧士宅に移動**



嶺岡紀行 1792年2月7日から  
12日までは火事の事後処理と幕  
府への報告で終始、幕府からの  
指示で調査を再開。  
以下は戻るまでの記録である。

2月13日 西一・二牧の駒取り  
2月14日 東上・下牧の駒取り  
2月15日 雨天で休息  
2月16日 馬選び  
2月17日 柱木牧の駒取り  
2月18日 馬の払い下げ  
2月19日 御殿山登山  
2月20日 雜事整理  
2月21日 東牧視察  
2月22日 江戸から手紙  
2月23日 白牛酪製造  
2月24日 西牧視察  
2月25日 休息  
2月26日 帰宅準備

いはひつつ よりもつかれぬ荒駒を  
捕手のものの なれしあつかひ  
(14日の駒取りを見て)



やま陰は 雪や残ると みるまでに  
軒端をうつむ 花の一むら

17日の柱木牧で山際の民家に桜の  
盛んなるを見て読んだ歌。

# 嶺岡紀行（江戸戻り）

2月27日（雨の中で出発）細野・吉野宅→佐貫

2月28日 佐貫→姉ヶ崎

2月29日 姉ヶ崎→八幡

3月1日 千住で休息後に虎ノ門自宅に帰宅  
(娘の死亡で謹慎行動)

嶺岡の白牛母子は江戸城の雉子橋の野馬方役所に移送。牛乳を煮詰めて「白牛酪」を製造、薬として高価販売された。



鴨川市発行：嶺岡牧から



雉子橋の位置（人文社）

## 時代と里山の変遷

江戸時代は小氷期の気候変動の中にあり、27回にも及ぶインフルエンザ流行・火山噴火（富士山・浅間山）・地震・飢饉そして虎狼痢（コレラ）、徳川幕府の財政は窮乏していった。

幕府は打開策として享保・寛政・天保の改革を打ち出した。嶺岡牧では、江戸での「白牛酪」の製造、江戸向けの炭の生産が柱となった。いずれも幕府の維持を目的としたものであったが、根本的な矛盾は拡大して江戸時代は終焉する。

嶺岡牧の再興は家畜増加による農業生産力の向上・炭の生産を奨励により地域内の林や森と人の関わりを強める効果をもたらした。大井地区は「里山」として整備されていったのである。

# 「里山」で生き、「里山」で考える

明治以降の「近代化」には膨大な資源が必要であり、海外進出の流れを作り、自然と共生してきた生態系を破壊しただけなく、「里山」から人を遠ざけるものとなつた。

1850年前後から小氷期から「温暖な時代」に入ったことも生産力を後押し、都市部の人口集中と地方の過疎化は加速し、格差も拡大していった。

異常な気候変動の時代に入ると、大規模な自然災害が多発、疫病の蔓延(パンテミック)もあって、多くの人々が自然と共生する生き方を見直すきっかけになっている。

これから地域の在り方を考える上で「白牛」から何を学べるのだろうか？